

メッセージアウトライン サムエル記第一6:1～21 「帰って来た神の箱」

<5章の要約>

ペリシテ人はイスラエルの神の箱を奪って、自分たちの町アシュドデまで運んで来た。

「アシュドデ」…ヨッパとガザの中間にあり、地中海沿岸から約5キロメートル内陸の町。

そこには彼らの神ダゴンの神殿があり、彼らは奪ってきた神の箱をそのダゴンの像の傍らに置いた。「ダゴン」はカナンの偶像神バアルの父と言われている。

翌日、彼らが見るとダゴンは主の箱の前に地にうつぶせになって倒れていた。それで彼らはダゴンをもとの場所に戻したが、次に日の朝にはまたダゴンが地にうつぶせに倒れ、その頭と両腕は切り離され、神殿の敷居のところであり、胴体だけがそこに残っていた。二度も倒れていたということはこれは偶然ではないことを示している。そして、これはダゴンが主なる神の前に無力なものに過ぎないことを示すものである。神殿の敷居は俗界から聖なる世界へ入る境であり、それを踏むことは不敬と考えられていた。ダゴンの無力さを知ってもペリシテ人はなお自分たちの神を信じ礼拝しようとする姿勢を続ける。(1～5)

主の手はアシュドデの人たちの上に重くのしかかり、アシュドデとその地域の人たちを腫物で打って脅かした。(6) これは伝染性の腫物と考えられる。彼らはこの出来事はイスラエルの神の箱がこの地にとどまっているからだと考えて、ペリシテ人の領主全員を集め、相談した結果、神の箱をガテに移した。ここはアシュドデの南東約19キロメートルにある町。ここにはダゴンの宮はなかった。しかし、ガテでも主の手はこの町に下り、人々に腫物ができ、非常に大きな恐慌を引き起こした。(7～9) それゆえ、ガテの人々は今度は神の箱をエクロンに送った。エクロンはガテの北約25キロメートルの地。しかし、エクロンの人々もこの死の災いをもたらす神の箱を非常に恐れ、その叫び声は天にまで上った。それゆえ再びペリシテ人の領主全員が集まり、神の箱をもとの場所に戻すことを決める。(10～12)

<6章>

[1-2]「主の箱は七か月間ペリシテ人の地にあった。ペリシテ人たちは祭司たちと占い師たちを呼び寄せて言った。『主の箱をどうしたらよいのでしょうか。どのようにして、それをもとの場所に送り返せるか、教えてください。』」

その場所はエクロンの町の近くであったであろう。この問いの内容は①主の箱をどうしたらよいか。…このままでは死をもたらす災いがペリシテ人の地で続くことになる。②どのようにして、元の場所に送り返せるか。…どのような輸送手段で運ぶのか。

主の箱をイスラエル人から奪い取ったことの償いが何か必要か。

[3]「彼らは答えた。『イスラエルの神の箱を送り返すのなら、何もつけないで送り返してはなりません。神に対して償いをしなければなりません。そうすれば、あなたがたは癒されるでしょう。また、なぜ、神の手があなたがたから去らないかがわかるでしょう。』」

「…神に対して償いをしなければなりません」…これはとりもなおさずペリシテ人たちに罪過があることを前提としている。罪過には償いが必要である。

このペリシテ人たちの反応は、逆にイスラエルがその不信仰により主に打たれ、「栄光がイスラエルから去った」(4:21~22)とまで言いながら、主なる神に対する罪の意識を感じていない鈍感さをも示すものともなっている。

[4]「人々は言った。『私たちが送るべき償いのものは何ですか。』彼らは言った。『ペリシテ人の領主の数に合わせて、五つの金の腫物、つまり五つの金のねずみです。彼ら全員、つまりあなたがたの領主たちに、同じわざわいが下ったのですから。』」

「金のねずみ」…腫物をもたらす伝染病や作物の被害はねずみによってもたらされた。それゆえこのねずみをかたどった金の像をペリシテ人の領主の数にあわせて五つ作る。

ペリシテは五つの都市国家からなっていた。(アシュドデ、ガテ、エクロン、ガザ、アシュケロン)

[5]『あなたがたの腫物の像、つまり、この地を破滅させようとしている ねずみの像を造り、それらをイスラエルの神に貢として献げなさい。もしかしたら神は、あなたがたと、あなたがたの神々、そしてあなたがたの地の上にのしかかっている、その手を軽くされるかもしれません。』」

ペリシテ人にとってイスラエルの神、主に対して真の信仰は持っていなかったが、それでもこの神に貢を献げるということは、神がイスラエルだけではなくペリシテをも支配されるお方であることを認めることになる。

[6]『なぜ、あなたがたは、エジプト人とファラオが心を硬くしたように、心を硬くするのですか。神が彼らに対して力を働かせたときに、彼らはイスラエルを去らせ、イスラエルは出て行ったではありませんか。』」

ペリシテ人たちはイスラエルの出エジプトの出来事を知っていた。→出エジプト記 参照

それゆえ、ペリシテ人の祭司や占い師たちはそのことを例として、神の箱をイスラエルの地に送り返すように勧める。

[7-9]『今、一台の新しい車を用意し、くびきを付けたことのない、乳を飲ませている雌牛を二頭取り、雌牛を車につなぎ、その子牛は引き離して小屋に戻しなさい。また、主の箱を取って車に乗せなさい。償いとして返す金の品物を鞍袋に入れて、

そのそばに置きなさい。そして、それが行くがままに、去らせなければなりません。注意して見ていなさい。その箱がその国境への道をベテ・シェメシュに上って行くなら、私たちにこの大きなわざわいを起こしたのはあの神です。もし行かないなら、神の手が私たちを打ったのではなく、私たちに偶然起こったことだと分かります。』

新しい車とくびきを付けたことのない二頭の雌牛は神聖な用途に用いることを示す。→民19:2 「ベテ・シェメシュ」…太陽の家の意。エクロンから南東に約18キロメートルの山地。ユダ部族の境にある。祭司アロンの子孫たちに与えられた町。→ヨシュア15:10、21:16 神の箱がイスラエルの地にあるベテ・シェメシュに上って行くならわざわいを起こしたのはイスラエルの神、そうでなければ偶然だとペリシテ人の祭司や占い師たちは判断した。

[10-11] ペリシテ人たちは祭司や占い師たちのことばに従ってそのようにした。

[12]「雌牛は、ベテ・シェメシュへの道、一本の大路をまっすぐに進んだ。鳴きながら進み続け、右にも左にもそれなかった。ペリシテ人の領主たちは、ベテ・シェメシュの国境まで、その後について行った」

雌牛はベテ・シェメシュへの道を右にも左にもそれずまっすぐに進んだ。「鳴きながら進み続け」とは小牛を離された母牛の本能に逆らって歩いている様子。これはイスラエルの主なる神の力によるもので偶然ではない。ペリシテの領主たちがついて行ったのは、果たしてどうなるかを確かめるためである。

[13]「ベテ・シェメシュの人たちは、谷間で小麦の刈り入れをしていたが、目を上げて見ると、神の箱が見えた。彼らはそれを見て喜んだ」

小麦の刈り入れは5~6月にかけて行う。この頃には地域の住民はこぞって畑に出る。そこで彼らは戦場でペリシテ人たちに奪われた神の箱が牛にひかれた車の上に乗せられて近づいて来るのを見た。神の箱が奪われ、「栄光はイスラエルから去った」と絶望し、嘆いていたその神の箱がイスラエルの地に帰って来たのである。彼らが喜んだのは当然であろう。

[14]「車はベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑に来て、そこにとどまった。そこには大きな石があった。人々は、車の木を割り、雌牛を全焼のささげ物として主に献げた」

神の箱を運ぶという聖なる目的に用いられたものは、他の目的には使用できないので、彼らはその車の木を割って薪とし、雌牛は全焼のささげ物として主に献げた。「全焼のささげ物」とは動物のいけにえを祭壇の上で全部焼いて煙にし、主なる神へのなだめの香りとするもので、主への全き献身をあらわすものである。

[15]「レビ人たちは、主の箱と、そばにあった金の品物の入っている鞍袋を降ろし、その大きな石の上に置いた。その日、ベテ・シェメシュの人たちは全焼のささげ物を献げ、いけにえを主に献げた」

ここは14節の別の説明であると思われる。ベテ・シェメシュは祭司やレビ人たちが住む町であったのでレビ人たちが手早く雌牛を屠り、祭司たちが全焼のささげ物と

して主に献げたのであろう。主の箱と金の品物の入った鞍袋はヨシュアの畑にあった大きな石の上に置かれた。

[16]「ペリシテ人の五人の領主は、これを見て、その日エクロンに帰った」

これで彼らはペリシテ人を死に至るわざわいで打ったのはイスラエルの神、主であることをはっきりと知った。以後、彼らはイスラエルを侵略したり、戦いを交えなければよいと思うが、実際はそうはならない。相変わらずペリシテとイスラエルの戦いは続くこととなる。

[17-18]「ペリシテ人が償いとして主に返した金の腫物は、アシュドデのために一つ、ガザのために一つ、アシュケロンのために一つ、ガテのために一つ、エクロンのために一つであった。すなわち、金のねずみは、五人の領主に属するペリシテ人の町の総数によっていた。それは、砦の町と城壁のない村の両方を含んでいる。彼らが主の箱を置いたアベルの大きな台は、今日までベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑にある」

ここは鞍袋に入っていた金の品物の詳しい説明である。それはペリシテ人を死に至る恐慌と腫物をもたらしたねずみの金の像である。これを彼らは神の箱を奪った償いのために主にささげたのである。「アベル」とはこの後19~20節で起こるイスラエルの民の嘆き「アーベール」から取られた呼び名であると思われる。

[19-20]「主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた。主の箱の中を見たからである。主は、民のうち七十人を、すなわち千人に五人を打たれた。主が民を激しく打たれたので、民は喪に服した。ベテ・シェメシュの人たちは言った。『だれが、この聖なる神、主の前に立つことができるだろう。私たちのところから、だれのところに上って行くのだろうか。』」

聖別されていない一般の人々が聖なる神のご臨在を表す「主の箱(神の箱)」に近づくと、必ず災いを受ける。→民数記4:15~20 ベテ・シェメシュの人たちは好奇心から主の箱の中を見たのであろうか。しかし、それは禁じられていたことであった。

「七十人を、すなわち千人に五人を打たれた」とは不思議な表現であるが、そうすると当時のベテ・シェメシュの人口は約一万四千人であったということが推測できる。主の厳しいさばきの前に民は喪に服した。彼らはこの出来事から聖なる主を恐れ、「だれが…主の前に立つことができるだろう。…だれのところに上って行くのだろうか」と互いに問い交わす。

[21]「彼らはキルヤテ・エアリムの住民に使者を遣わして言った。『ペリシテ人が主の箱を返してよこしました。下って来て、あなたがたのところに運び上げてください。』」

「キルヤテ・エアリム」…森の町と言う意味。ベテ・シェメシュの北東約12キロメートルの地。

本当なら「主の箱」はもともと安置されていた「シロ」に返されるべきであったと思われるが、シロの主の宮はすでにペリシテ人によって滅ぼされていたのかもしれない。→詩篇78:60~64、エレミヤ7:12~14 それでベテ・シエメシュから地理的に近いキルヤテ・エアリムが選ばれたのかもしれない。

戦いに負け、主の箱がペリシテ人に奪い取られ、「栄光はイスラエルから去った」と人々は嘆いたが、しかし、主なる神は変わらずに生きておられ、どこにでも臨在され、ご自分が聖であり、力ある真の神であることを示される。ペリシテ人たちは自分たちが奪った主の箱のことで主のさばきを受け、ねずみによる伝染性の腫物により多くの者が死んだ。彼らは自分たちのしたことの償いとして

金のねずみの像五つと主の箱を雌牛二頭にひかせた車に乗せてイスラエルのベテ・シエメシュに送り返した。しかし、本当の罪過のためのいけにえは金のねずみでもなく、牛でもない。ペリシテ人はこれで一時的な平安を得ることができたが、主の箱が戻されたイスラエルはどうであったか。

イスラエルの民は指導者モーセに率いられてエジプトを脱出してシナイの荒野を旅したが、度重なる彼らの不信仰により、彼らは四十年の間シナイの荒野を旅しなければならず、その間に不信仰な民は皆死に、彼らの子どもたちの世代が約束のカナンの地に入ることとなった。モーセの後を継いでイスラエルの指導者となったヨシュアに率いられたイスラエルの民は約束のカナンの地に入り、先住民を滅ぼし、その地に定住することとなった。しかし、その後のイスラエルは士師記を見ると分かるように信仰的には後退し、土着の宗教も取り入れ先祖アブラハム以来の真の神の選びの民としての一体性を弱め、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。→士師記21:25

ペリシテ人の地から送り返されてきた主の箱の取り扱い方も知らず、その箱の中を見るという過ちを犯し、その結果、主は民を激しく打たれ、多くの者が死んだ。イスラエルの民こそ彼らの不信仰を悔い改め、形だけの償いや、いけにえではなく、真実に主なる神に立ち返らなければならない。

→イザヤ59:1~2、箴言3:5~6、Iヨハネ1:6~10

イスラエルはカナンの地に定住してから、自分たちを守り、導いて来られた主なる神を軽んじ、恐れ従うこともせず、長年にわたり不信仰な生き方を続けて来た。それゆえペリシテ人との戦いで敗北し、神の箱まで奪われてしまった。主はペリシテ人を用いてイスラエルをさばかれたのである。彼らは「栄光はイスラエルから去った」と嘆いたが、なおその生き方には今までの生き方の悔い改めが見られない。ペリシテ人も神の箱を奪ったことの償いをなしたが、偶像に仕えるその生き方を変えることをしない。すなわち、イスラエル人もペリシテ人もどちらも真の神の前に罪ある生き方をしているのである。このアダム以来の根源的な人間の罪こそ問題なのである。

旧約時代に神は律法を与えられ、イスラエルの民はそれに従って牛や羊などの動物のいけにえを献げたが、それはやがて来られる真の救い主の贖いを予表するものであった。

主なる神はこの罪ある人間を、決して見放さず、滅ぼさず、かえってはかり知れない愛をもって導き続けて下さり、イスラエルの歴史を通して、やがて真の救い主、贖い主を与えてくださることになる。それは罪のない神の御子イエス・キリストのことである。主はこのお方を人としてこの世に送られ、その十字架の死による贖いによって救いの道を開いてくださった。旧約時代から見ると、それは未来のことであるが、現在の私たちから見ると、それは今から約二千年前に実現したことである。自分が神の前において罪深い存在であることを認め、このお方を自分の罪の贖い主、救い主として信じ受け入れる者は救われ、神のものとされる、呪いや滅びではなく、永遠のいのちを受け、祝福された道を歩むことができる。もはや動物のいけにえや、さまざまな献げものをする必要はない。ここに計り知れない神の恵みがある。→ヨハネ3:16